

# 水ひとつなぎ

人が集まって住む中心部にするために

## コンセプト

越前大野の記憶が人と人をつなぐ。

人を呼ぶツールとしての水

を媒介に、住民と訪れた人の接点となる場所を具体的に提案する。

まち歩きの中で

まちの至る所で水の流れる音が聞こえてくる。

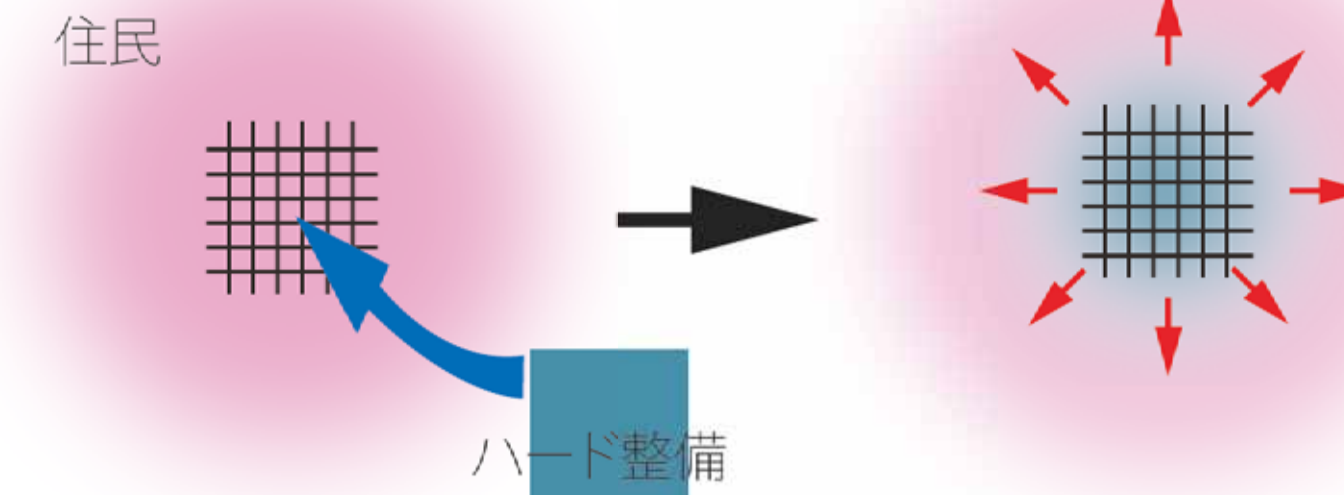
道と水路が交わったり、並んだり、離れたり、水路が道をつくっている



大野のまちの基盤 = 水

## 問題提起

住民と観光客の関係が疎遠



現在、大野では、観光客を呼び込もうと中心部に多くの整備がなされている。しかし、私たちがまち歩きをして感じたこととして、この整備が観光に偏り、住民の生活と密接であった水は遠い存在となってしまっている。その結果、水を介した住民と観光客との関係は薄れ、大野の魅力は薄れつつある。

## 水系の歴史的変遷

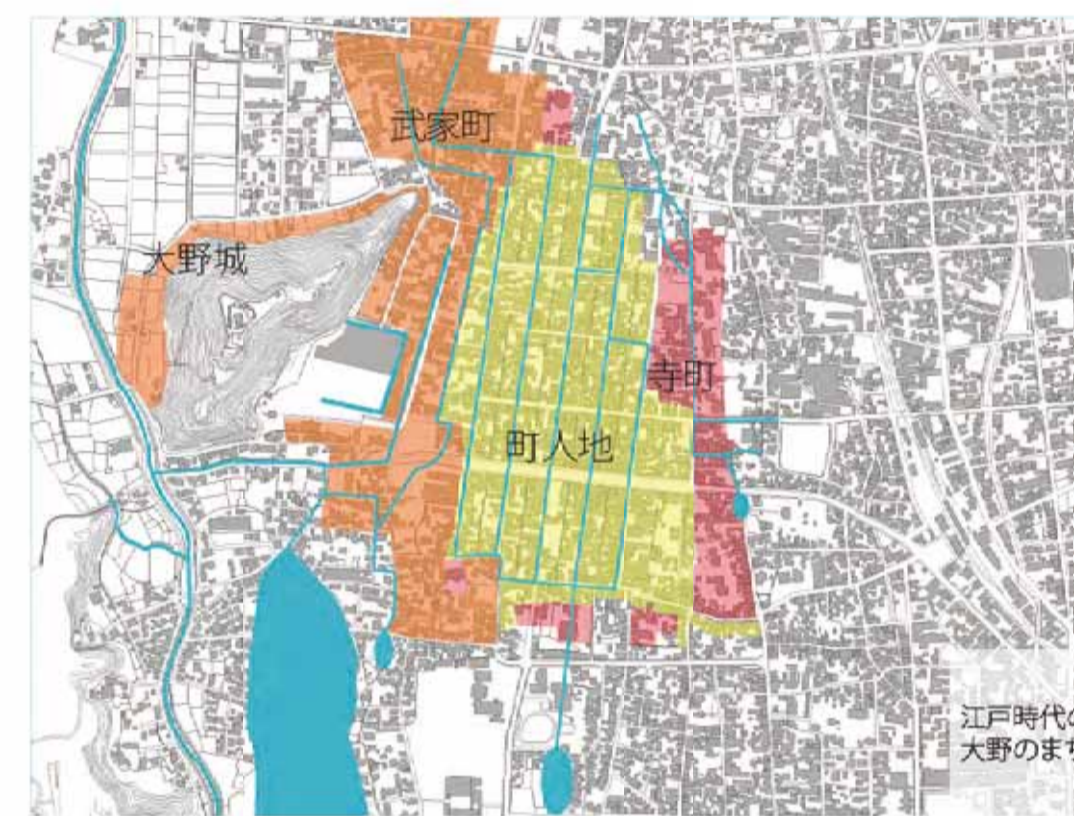
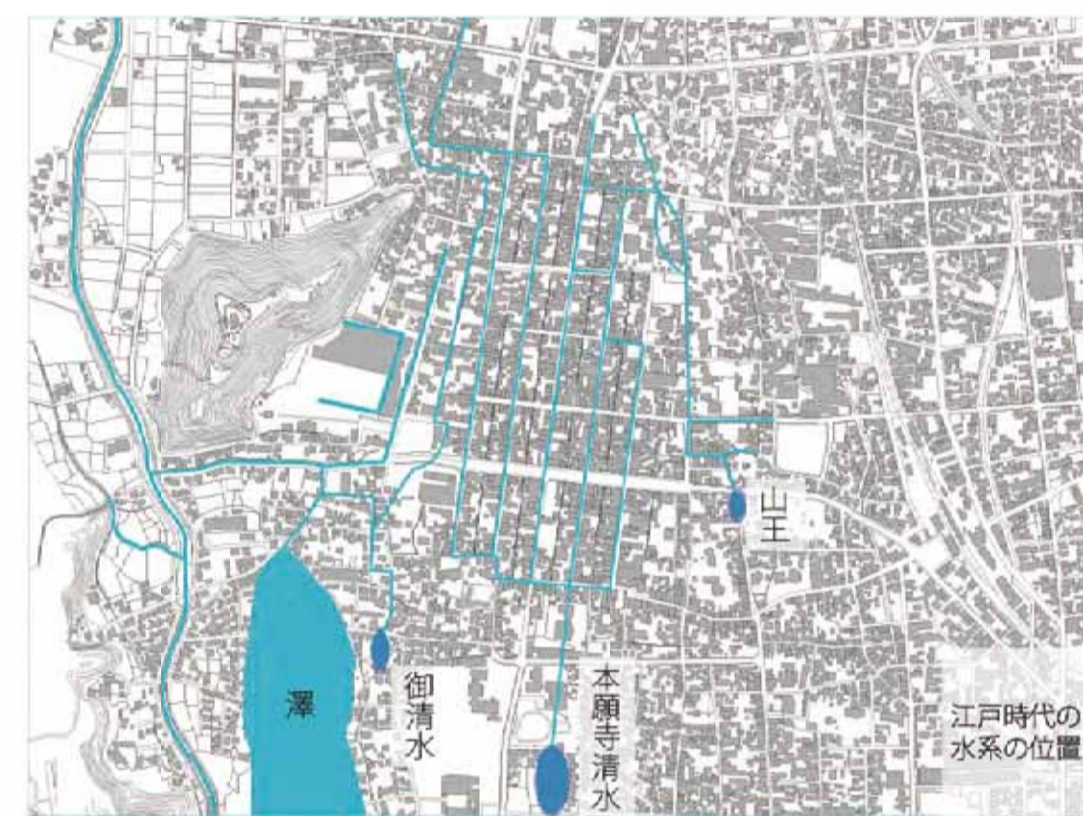
江戸時代

町割り、使う人によって水源が分かれていた。

Ex) 寺町の水源→寺町の寺社

本願(寺) 清水→町人町の人々

御清水→殿様の米を洗うため



昭和

清水が市内に40~50カ所存在し、住む人たちの生活の中にとけ込んでいた。

Ex) 野菜や果物を洗う

酒を冷やす

水遊び

昭和30年代 「御清水の最高の贅沢」



酒を清水で冷やし、囲碁をする男性たち。

昭和32年 「義景清水の風景」



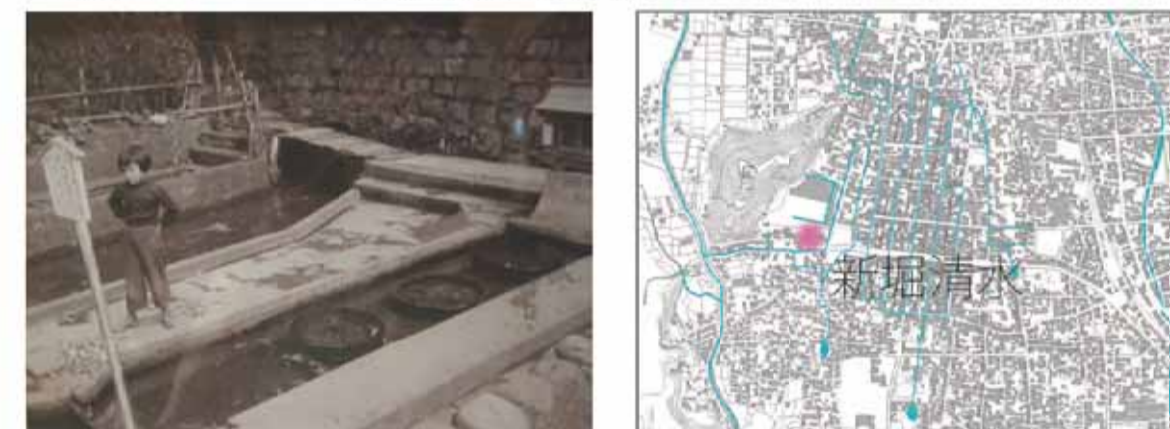
野菜を清水で洗う女性たち。

昭和34年 「本願清水の風景」



子供たちの水遊び

昭和41年 「新堀清水の風景」



道と同じ高さでも勢いよく湧く清水

現在

町の中を歩いていても、住民と水の関わりが見えにくい。

観光を意識した整備が行われている。

現在の観光拠点



結ステーション

現在の水路

住宅地の中のふさがれた水路



住民と水との関わりが見えにくくなっている場所がある。

隠された背割水路



もう一度中心部に人が集まって住む場をつくるためには、住民と来街者を結ぶ必要がある。

大野の水には人と人をむすぶポテンシャルがある。

観光寄りでの住民の生活から離れた整備

実現する為に大野の水をツールとして、具体的なシーンを提案する。

昭和頃まで



現在



将来像

